

ベッドから腕だけを出して、床に落ちていたスマホを掴む。こっちに引き寄せるが、充電器のコードがベッドの縁に引っ掛かっていて手繰り寄せることができない。

ふんつ、と引っ張ると、充電器がコンセントから抜け落ちたらしく、ガタンという音が無音の部屋に響いた。もう電気が走っていないコードが刺さっているスマホを片手に、私は隣で眠る修也の顔を覗き込んだ。気持ちよさそうに寝息を立てる修也の寝顔を数秒見惚れて、胸を撫で下ろす。

仮に目を覚ましたとしても、修也は怒ったりしないという確信がある。けれど、修也が起きるのは毎朝六時で、それまで修也の睡眠を妨げてはならない。誰かに強いられた訳でもなく、修也の家に来るようになってから三年間、自分自身に課しているルールであった。

修也に背中を向けるように寝て、スマホの画面を点けた。三時十五分。修也の誕生日と同じ数字の並びに小さな高揚感を覚える。時刻の下にメッセージアプリの通知が表示されていた。今日は一件だけだが、修也の家に来た日はいつも返信が滞ってしまう。二人で居られる時間が尊くて、一瞬でも無駄にしたくないあまりに修也という間はスマホになんか触らない。というか、外の世界の存在すら忘れてしまう。

アプリを開くと、美樹から来週行く店を予約したという連絡が入っていた。あんがと！と打ち込むけれど、こんな時間に返信したところでどうせすぐには見ないし、明日ゆつくり返せばいいかと思に至る。そもそもこんな深夜か早朝か人によって意見が分かれそうな時間に返信するなんて友達といえども非常識だ、と心の中で呟きながら、書いた文字を消した。

スマホの画面を消して、仰向けになる。天井がやけに高く見えた。いつもの習慣で無意識にスマホを触ってしまったが、修也を起こしてしまう可能性を引き上げてまで知りたい情報などなかった。しかし暗い中で一人、無言で過ごすのは至極退屈である。来週、美樹とは何を話すのだろうか。美樹は高校のとき初めて出来た友達で、別々の大学に通っている今でも定期的に会う仲である。とはいえ、美樹が留学に行っていたから会うのは一年ぶり、少し緊張している自分がいた。こっちは散々だった就活のせいで大卒フリーターコースまっしぐらなのに、美樹は三年生のうちに外資系のコンサルから内定を貰っていて本当にすごい。高校の時はずっと一緒にいて同じくらい勉強が嫌いだっただのに、いつこんなに差がついてしまったのだろうか。

こう考えてみると、美樹と楽しく話せる話題などひとつもないように思えてくる。日本から一步も出たことないし出る気もない私が、留学での思い出話に興味をもてるとは思えなかった。就活関連の話題は最悪だし、そもそもどんな話であろうと、将来がちらつく内容だと二人の現在地の違いが浮き彫りになるだけで盛り上がることはないと言言できる。この間まで外国にいた美樹は今期のドラマも見ていないだろう。日本に帰ってからもゼミとバイトが忙しいと言っていたし、いま私と修也がハマっているスマホゲームも、名前すら知らないはずだった。

高校のときは、授業中も休み時間も喋っていた。それでも足りなくて、家に帰ってから電話を繋いだし、週末もよく出掛けた。二人だけで世界が作られていた日々がこの間のことのように思い出せるのに、いまは数時間食事を共にするだけで話題探しに困っている。私は修也の家という竜宮城に籠った浦島太郎で、外界で生活していた美樹とは流れる時間が違っていたのではないだろうか。そう思うと、お姫様の恰好をしてゆらゆらと踊る修也が突然現れて、やらされてる感満載の表情がおかしくて笑ってしまった。

そういえば、美樹は彼氏と仲直りしたのだろうか。

確か、前回ご飯に行ったとき、モラハラ気質の彼氏が無神経な発言をしたせいで大喧嘩になって冷戦状態、と言っていた。すっかり忘れていたが、一通り不満を吐き出した美樹が礼儀のように私の恋愛事情を聞くものだから、すぐく気を揉んだ。こちらが幸せモード全開では嫌味になるし、かと言って、修也の嫌なところを挙げてでも不満の些細さが逆に私たちの良好な関係性を裏付けてしまいそうで、結局曖昧にはぐらかして話題を終わらせたことを思い出した。来週も同じことになるのかな、という思いがよぎると楽しみだっただけの予定が憂鬱で上塗りされていきそうで、思考を遮断するために身体を修也のほうに向けた。

修也が右半身を下にして寝ている間、私はその無防備な寝顔を拝み放題である。窓のすぐ外にある街燈の光がカーテンの隙間から入って来て、修也の顔を絶妙な加減で照らしてくれていた。整った鼻筋が強調され、睫毛が普段より長く見える。何よりも、ニキビとは無縁な白い肌が、無機質な白色光によって神々しい領域にまで昇華されていた。この場所に街燈が必要だと言い出した人に御礼申し上げたい所存である。

修也の顔は、いつ見ても美しい。毎日見ている私が思うのだから、これは紛れもない事実である。今日だって、一緒に見ていたテレビの中のアイドルが修也にあまりにも似ている、思わず隣にいる本人に伝えた。

「この人、いつも思うけど修也に似てるよね」

「どうかな」

「すっごい似てるよ！ 私が言うんだから間違いないよ」

「ありがとね」

「会社で言わない？ 柳さんって星龍平に似てますねって」

「言われたことないよ。奈緒が初めて」

「えー！ みんな思ってるけど、恥ずかしくて言えないだけだよ。普段の修也ちよっと不愛想だから、躊躇っちゃうんじゃない」

「そうかな」

「そうだよ。絶対、修也がいなくて、柳さんって星龍平に似てるよねって噂してるよ。今度本人に言ってみてくださいよ、えー無理だよ私そんなに柳さんと喋ったことないし恥ずかしいよ、っていう会話が給湯室で行われてるんだよ」

「奈緒は面白いね。俺、コーヒーもう一杯飲むけど、奈緒もいる？」

「私はいいかな。修也はテレビ見てていいよ。私が淹れてくる」

「大丈夫。トイレに行くついでだから」

このとき、修也は素っ気なかった。いまをときめくアイドルに似てると言われて照れてしまったのか。私が喋りすぎただろうか。もしかしたら、不愛想という言葉が良くなかったのかもしれない。でも、俺は明るく話すのが苦手だけど奈緒はいつも笑顔で偉いね、って修也は言っていた。だから大丈夫なはずだけど、たとえ自分で認識していても、短所を他人に指摘されると余計にカチンとくることもある気がする。絶対にそうだ。私の軽率な言葉が修也の機嫌を損ねてしまったのだ。

真夜中に手持ち無沙汰になると、いつも修也との会話をプレイバックしてしまう。一人反省会を開催して、どうすれば良かったのかを考えては修也との会話をやり直して、そして眠れなくなる。美樹にこの話をしたとき、全く共感を得られなかった。

「脳内の修也と、会話をするの」

「それって意味なくない？」

「そうなんだけど、しちゃうんだよね。どうしても」

「そっか。私も今度やってみようかな。頭の中だったら、こっちの期待通りの言葉を掛けてくれそう」

「それが、なかなか思い通りにいかないの。私も普段絶対に言わないようなことを言っちゃうこともあるし」

「え？ 奈緒の頭の中でやってるんだよね？」

「そうなんだけどね。段々話が逸れちゃったりして、難しいの」

「そっか。二人でエチュードしてる感じなのかな」

「うん。そんな感じ。脳内でエチュードしながら修也と話してるの」

美樹にはそう言ったけれど、エチュードという言葉聞いたことがなかった私は、帰りの電車で「エチュード 意味」と検索した。

即興劇。場面設定だけで、セリフや動作などを役者自身が考えながら行う劇。

まあこんなところか、と納得しながらも少しの違和感が残ったのが思い出される。単に演技をするというよりも、修也を喜ばせる言葉を探す作業なのだ。どこかに正解は必ずあって、その正解を見つげるために修也の出方を窺いながら言葉を発する。美樹と話していたときは思い付かなかったけれど、エチュードよりもじっくり来る言葉がある気がしてきた。どう言えばよかったのだろうか。そうだ、詰め将棋だ。修也が打つ駒を見て、私はあれこれ考えながら次の一手を打ち、それに対する修也の反応でまだ詰んでいなかったことを知る。これだ。私は夜な夜な修也とのエチュード詰め将棋をやっているのだ。

「この人、いつも思うけど修也に似てるよね」

「どうかな」

「すっごい似てるよ！ 私が言うんだから間違いないよ」

「ありがとね」

「会社で言わない？ 柳さんって星龍平に似てますねって」

「言われたことないよ。奈緒が初めて」

「ここだ。このあとの一言で状況は変わるのだ。」

「だって修也の肌も白くて綺麗だし、目が切れ長で睫毛長いし、絶対似てるよ」

「そうかなあ。そんなこと言ってくれるのは奈緒だけだよ」

「そんなことないよ！ 友達に修也の写真見せると、彼氏イケメンで羨ましいって言われるもん」

「そっか。ありがとね」

修也は無理やり作ったような笑顔でこちらを見る。まただ。またこの顔だ。どうすれば詰みまで到達するのだろうか。

「それなら、修也は芸能人だと誰に似てるって言われる？」

「うーん。一回だけ平井明弘みたいって言われたことある」

「それってこないだのドラマで刑事やってた人でしょ。あんな皺だらけのおじさんなんて全然似てないよ！」

「どうだろうね」

修也はマグカップの底に残っていたコーヒーを飲み干して、退屈そうにテレビに視線を戻してしまった。

どうして、こんなに自己評価が低いのだろうか。どう見たって素敵の塊なのに。そのことを、私が月日をかけて全力で伝え続けているのに。

「修也は、私のこと好き？」

「何それ。好きだけど」

「私が褒めても嬉しそうじゃないから」

「そんなことないよ。嬉しいよ」

「そしたらさ、どのくらい好き？」

「どのくらいって、それ表現するの難しくない？　じゃあ、奈緒は俺のことどのくらい好きなの？」

なるほど、いざ聞かれると難しいことこの上ない。カウンターが来るとは思ってもいなかった。目が泳いでいるのが自分でもわかった。このくらいかなと言いながら、両手をうんと伸ばしてみると、修也はふっと息を漏らして笑った。

そんな、鼻で笑わなくてもいいじゃん。どのくらい好きって言ったって、また私がばーっと喋りまくったら嫌な顔するんでしょ。わかったよ。全部言うよ。

横軸がかっこよさで縦軸がかわいさのグラフがあったら、右上にはみ出た点が修也だよ。ちなみに、中途半端なゾーンに浮いているのがさっきのアイドルで、左下の点がおじさん俳優ね。あとはね、目に入れても痛くないほどかわいって言う言葉あるじゃん。あれ、私なら本当にできるよ。毎朝コンタクトレンズ入れるときに、こんなペラペラのプラスチックじゃなくて修也を目に入れたいと思ってるもん。そりゃ、ちよっとは痛いだろうね。目が充血して涙も出るだろうけど、それは拒絶じゃなくて愛情の証なんだよ。ほんとだよ。今度証明してあげるから、私の角膜に飛び込んできてよ。修也と同じ世界を見れるなら、痛みくらい幾らでも我慢できるよ。修也が私の目に入るのに抵抗があるなら、私が修也の身体に入ってあげる。修也の肛門に頭を突っ込んで、腸も胃も食道も通り抜けて、私は完全に修也の中に収まることができるんだよ。私たちは同じ歩幅で歩いて、同じ言葉を吐き出して、同じものを食べて一緒に消化できるようになる。そうだったら最高じゃない？　それがいいね。そうしよう。ね。ね。

鼻の脇と左頬に冷たい感触があつて我に返った。いつの間にか修也は寝返りをうっていて、健康的な黒髪に包まれた後頭部をこちらに向けていた。

私は枕元のスマホを手にとって、画面を点けた。五時二十八分。あと少しで私の誕生日だということに、修也は気づいているのだろうか。